仲良し姉妹は臭い仲？（加筆前）

　双子には大きく分けて２種類ある。
「一卵性双生児」と「二卵性双生児」だ。
前者はＤＮＡが同じなので、性別、血液型も同じになり、容姿もよく似ている場合が多い。
一方、後者はＤＮＡが違うため、性別や血液型が異なる場合もあり、容姿が似ていない事も少なくない。
私――早坂（はやさか）マユと姉のミサも後者のため、あまり似ていない。
同じ宝陽学園の１年生で、身長も殆ど同じだが、それ以外は正反対だ。
私はセミロングの髪を一本結びにしているが、姉さんはショートボブである。
顔立ちも、私が「クールそうな女」だと言われるのに対し、姉さんは何処か中性的でボーイッシュだと言われる。
体型にも大きな差があり、姉さんの方が圧倒的にプロポーションがいい。
友人も多く、私にとっては自慢の姉なのだが、そんな彼女にも欠点はある。
その数少ない欠点こそが私の大きな頭痛の種なのだった。

＊

　ある土曜日の午後。
私は電話口で親戚の少年と激しい舌戦を繰り広げていた。
「スティーブは前作で組織は腐敗する事を痛感しています。ですから、あの協定には賛同できなかったんです。それがわからないんですか？」
『だが、あの状況で署名を拒否すれば、国連を敵に回す事にもなったんだぞ？』
「だから、国連の操り人形になれというんですか？」
『別に本気で従う必要はない。チームを維持するためにも、取り敢えずは国連に従う振りをしておけばよかったんだ』
「そういう姑息な事をしないのがスティーブの魅力で――」
結局、15 分以上も続いた口論は最後まで平行線を辿り、私たちは疲労を理由に通話を打ち切った。
「あの人に勧められて見始めたアメコミ映画ですが、未だに意見が合いませんね」
溜め息混じりに独り言を言って、私はソファーに腰を下ろしてレンタルしてきたＤＶＤを再生させる。
（そもそもこの映画だって、事の発端はトニーの――）
「マ～ユ～♪」
「っ！？」

ふいに左側から襲ってきた衝撃が私の思考を中断させる。
「何か用ですか、姉さん？」
問い掛けながら、私は自分に抱き付いている姉さんを強引に引き剥がす。
先程の衝撃は彼女がタックルしてきた事によるものだったのだ。
「私はこれからＤＶＤを見るんですから、邪魔しないでください」
「う～っ、可愛い妹が冷たいよ～」
引き剥がされた姉さんがわざとらしく泣き真似をしてみせる。
「はぁ・・・」
これが私の頭痛の種にして、姉さんの欠点。
彼女は「妹いじり」を趣味とする重度のシスコンなのだ。
「抱き付くなとは言いませんが、せめて一言ぐらい断りを入れてからにしてください」
「は～い。じゃあ、確認するけど、おっぱい触っていい？」
両手をワキワキさせる姉さんの額に、親戚（先程の電話の相手）から貰ったMEU（エー）ピ（ア）ス（ガ）トル（ン）を突き付ける。
「いい加減にしないと、撃ちますよ？」
「お、お姉ちゃんはあなたをそんな物騒な妹に育てた覚えはないわよ！？」
「心配しなくても、弾は入っていませんよ」
そう言って、私はMEU（エー）ピ（ア）ス（ガ）トル（ン）を引っ込める。
「そもそも私の胸なんて触ろうとするんですか？胸なら姉さんの方が大きいでしょう？」
「自分のおっぱいなんか触って何が面白いのよ。私は可愛い妹のおっぱいが触りたいの！」

バンッ！

「そんなくだらない事を力説しないでください。それと、飲み物が零れるので、テーブルを叩かないでください」
そう告げて、私はテレビに視線を戻す。
「マ～ユ～！ねぇ、マユったら～」
「揺すらないでください。テレビが見えません」
「１度見た映画より、血を分けた実の姉を構え～」
姉さんがさらに振れ幅を大きくして、私の身体を揺さぶってくる。
「・・・」
構うと面倒な事になるのは目に見えてくるので、無視を決め込んでテレビに集中する。
「とことん私を無視する気なのね。だったら、こっちも切り札を出すわよ」
（切り札は先に出した方が負けなんですけどね）

ぷううぅぅ～っ。

ふいに姉さんの方から壊れたラッパのような音が聞こえてきた。
それを怪訝に思ったのも束の間、
「っ！？」
背後から伸びてきた姉さんの手が私の鼻と口を塞いだ。
「むぐぅっ！？」
間を置かず、腐肉のエキスを濃縮したような悪臭(におい)が鼻腔に流れ込んでくる。
「ふっふっふっ、お昼に牛丼を食べたから、くっさいでしょ？私を無視した罰よ♪」
姉さんが私を解放して勝ち誇ったように笑っている。
どうやら今の悪臭(におい)は姉さんの握りっ屁だったようだ。
「ごほっ、ごほっ・・・ね、姉さん！年頃の女の子なんですから、少しは慎みを持ってください！」
咳き込みながら抗議しつつ、視線をテレビに戻す。
これで私が関心を示さなければ、さすがの姉さんも諦めるだろう。
「ふ～ん、これだけやっても無視するのね」
「・・・」
「マ～ユ～。スティーブの何処がいいの～？トニー派のお姉ちゃんに教えてよ～」
「・・・」
「こうなったら、私も奥の手を出すしかないわね」
「っ！？」
姉さんの「奥の手」という言葉に、急いで回避行動を取る。
しかし、体格で勝る姉さんはあっという間に私を組み伏せ、

ずしっ！

ちょうど上半分に覆い被さるように、私の顔へと座り込んでくる。
「ね、姉さん！ふざけるのもいい加減にしてください！」
「ふっふっふっ、怨むなら私の相手をしなかった５分前の自分を怨みなさい・・・んっ！」
姉さんが息んだ直後、

ぶうううううううぅぅぅっっっっ！！！

彼女のお尻から生温かい熱風が噴き出した。
「むううううううっ！？」
間を置かず、強烈な発酵臭が私の鼻へと流れ込んでくる。
「おおっ！マユがこんなに大声を上げるなんて凄いのね、私のオナラ♪」

「き、気が済んだのなら、早く退いてください」
「誰かに物を頼む時は『お願いします』でしょ？はい、やり直し・・・んっ！」

ぶぶぶぶぶうううううう〜〜〜っっっ！！！

私の頼みを一蹴し、姉さんがより強烈なオナラを浴びせてくる。
「はい。では、改めてお願いしてみて。私にどうして欲しいの？」
「お、お願い、します。オナラをやめて、私の上から、退いて、ください・・・」
息も絶え絶えになりながら、私は再び姉さんにお願いする。
「お断りしま〜す♪んっ♪」

ぶびびびびびいいぃぃぃぃ〜〜〜っっっ！！！

豚の鳴き声のような放屁音が私の鼓膜を揺らし、強烈な悪臭（におい）に鼻腔が焼け爛れていくような錯覚に襲われる。
「ちゃ、ちゃんと、お願い、したのに・・・」
「こういう時は、私の条件も呑むのが礼儀でしょ。今後、いつ如何なる時も私の事を邪険に扱わないって誓って♪」
「なっ、私は別に邪険にした訳では――」

ぶぼぼぼぼおおおおぉぉぉぉ〜〜〜っっっ！！！

私の反論は、またもオナラによって遮られた。
度重なる放屁責めで蹂躙された鼻腔を、今まで以上に強烈な悪臭（におい）が蹂躙していく。
「私が求めている答えは、ＪａかＯｕｉで〜すっ♪」
「どっちもＹｅｓじゃないですか・・・」
「んっ♪」

ぶおおおおおおおおぉぉぉぉぉ〜〜っっっ！！！

「むぐうううううっ！？」
「今言ったばかりでしょ。私が求めてる答えは、ДａかＳｉだけだって」

「だから、それはどっちもＹｅｓだと――」
「ふんっ！」

ぶぶぶっすううううううぅぅ～～～っっっ！！！

「んんーーーーーっ！？」
「早く答えないと、鼻がバカになっちゃうよ・・・ふんっ！」

ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぅ～～～～っっっ！！！

「むううううううううっ！わ、わかりました！誓う、誓いますから、退いてください！」
「よく言えました♪最初から素直にそう言ってれば、臭い目に遭わずに済んだのにね」
嬉しそうに立ち上がった姉さんは私の上体を起こし、そのまま隣に座ってくる。
「そ、そんなにくっつかないでくれますか？」
「あれあれ～？また私を邪険にする気かな～？」
「右手が使えないと、飲み物が取れないんですよ」
「心配しなくても、私が飲ませてあげるわよ」
そう言って、姉さんがコップを私の口許へ持ってくる。
「はぁ・・・」
深々と溜め息を吐きながら、私は喉を潤すべくコップに口を付けた。

＊

太陽が西に沈み、この後の展開は――

①妹による報復

②姉による追い討ち

①報復ルート

　目には目を、歯には歯を。
現代では「やられたらやり返せ」という意味で使われる言葉だ。
しかし、実際は「倍返しのような過剰な報復を禁じ、同等の懲罰に留めて報復合戦の拡大を防ぐ」というのが正しい解釈らしい。
そんな訳で、私は正しく「目には目を、歯には歯を」を行うために、姉さんの部屋へとやってきた。
現在の時刻は 23 時 48 分。
姉さんはベッドで気持ちよさそうに寝息を立てている。
（では、報復を始めましょうか）
姉さんを起こさないように気を付けながら、彼女の傍らへと移動する。
「んっ」
そこで右手をお尻に宛がい、お腹に少しだけ力を込める。

ブブウゥゥ〜ッ。

右手に生温かい熱風を感じたところで、

バッ！

私はすぐさまその右手で姉さんの鼻と口を塞ぐ。
「むぐっ！？」
鼻に流れ込む悪臭（におい）で、姉さんが苦悶の声と共に目を覚ます。
「な、何、今の悪臭（におい）！？もしかしてガス漏れ！？マユは大じょ・・・むぐっ！？」
状況が呑み込めず、隙だらけの姉さんの顔に座り込む。
ちょうど昼間に私がされたのと同じ態勢だ。
「こんばんは、姉さん」
「マ、マユ！？もしかして、さっきの悪臭（におい）はマユのオナラ！？」
「そ、その通りですが、あんまり大きい声で言わないでください・・・んっ！」

ブウウウウウウウゥゥゥッッッッ！！！

大声で騒ぐ姉さんを黙らせるため、私は２発目のオナラを放つ。

「むうううううううっ！？く、臭いぃぃぃぃぃぃっ！」
「昼間は私が臭い思いをしたんですから、今度は姉さんに臭い目に遭ってもらいます・・・んっ！」

ブブブブブウウウウウウ〜〜〜ッッッ！！！

かすかに感じる腐卵臭を黙殺し、淡々と説明しながら３発目のオナラを放つ。
「ね、寝込みを襲うなんて卑怯でしょ！」
「先に不意打ちした人が言わないでください・・・んっ！」

ブビビビビビイイィィィィ〜〜〜ッッッ！！！

全く反省する気配のない姉さんに、４発目のオナラを浴びせる。
「んむうううううっ！？は、鼻が、鼻が曲がるうぅぅぅぅぅっ！」
「そ、そこまで臭くないでしょう！とにかく姉さんには７発のオナラを嗅がされましたから、私も後３発は浴びせますよ・・・んっ！」

ブボボボボオオオォォォォ〜〜〜ッッッ！！！

きちんと宣言して、５発目のオナラを放つ。
「も、もう許して！本当に、本当に臭いから！」
「も、問答無用です！ふんっ！」

ブオオオオオオオオォォォォォ〜〜ッッッ！！！

「むおおおおおおおおっ！？ぐ、ぐざいぃぃぃぃっ！？」
姉さんが悲鳴のような声を上げている。
だが、ここで容赦する訳には行かない。
「ふんっ！」

ブブブッスウウウウウウゥゥ〜〜〜ッッッ！！！

心を鬼にして、６発目のオナラを放つ。
「んむうううううううううっ！？」
「これで最後です・・・ふんっ！」

ブブブブブブブブブブブブゥ～～～～ッッッ！！！

最後になる７発目のオナラを浴びせ、私は姉さんの上から立ち上がる。
「少しは反省しましたか？」
「マユって、おっぱいだけじゃなくて、お尻の感触も最高ね」
「不本意ですが、もう５発ほどオナラをお見舞いする必要がありそうですね」
「すみませんでした！」
姉さんは目にも留まらぬ速さでベッドに正座し、深々と頭を下げてくる。
恥も外聞もない見事な土下座だ。
「わかっていただけたようで何よりです。では、２つの事を誓ってください」
「えっ？私の時は１つだったのに？」
「何か言いましたか？」
「い、いえ、何でもありません！」
「よろしい。では、１つめ。今後、過剰にベタベタしないでください。遠すぎず、近すぎず、適度な距離感を守ってください」
「・・・はい」
酷く不満げながらも、姉さんは私の言葉に頷く。
「それと、もう１つ。こちらは絶対に守ってください。いいですね？」
「はい」
「では、明日・・・いえ、もう今日ですね。私の買い物に付き合ってください」
「えっ？」
「聞こえませんでしたか？私の買い物に付き合ってください、と――」
言い切るより早く、視界が大きく傾いた。
姉さんが勢いよく抱き付いてきたのだ。
「買い物ね！勿論、ＯＫよ！私がマユに１番似合う服を選んであげるわ！」
「いえ、私が買いたいのは新しい靴で・・・」
「靴ね！じゃあ、シンデレラのガラスの靴より素敵なのを選んであげるわ！」
「落ち着いてください、姉さん！買い物に行く時間まで後９時間はあるんですから！」
どんどんヒートアップしていく姉さんの声が響く中、夜はますます更けていくのだった。

選択肢に戻る。

②追い討ちルート

　ふいに布団の中で何かがもぞもぞと動いているのを感じ、私は目を覚ました。
部屋の照明は消えているが、暗闇に慣れた目が侵入者の姿を捉える。
「何をしているんですか、姉さん？」
私の問い掛けに答えるように、目の前に２本の棒状の物体が飛び出してきた。
その正体は姉さんの両脚だ。
「何って、夜這いに来たのよ？」
姉さんがまるで私の方が間違っているかのような口調で応じてくる。
「夜這いというのはまだわかりますが、どうして上下逆さまに入ってくるんですか？」
「決まってるじゃないの♪」
「っ！？」
そう答えると同時に、姉さんの両脚が私の頭を拘束し、さらに両腕が私の両脚を押さえ込む。
ちょうどプロレスでいう「ツームストンパイル・ドライバー」のような態勢だ。
「昼間、私のオナラを嗅いだ時のマユのリアクションが面白かったから、また見せてもらおうと思って・・・んっ！」

ぶうおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉ〜〜〜っっっ！！！

「むううううううううっ！？」
地の底から湧いてくるような重低音のオナラに顔を包み込まれ、私は苦悶の声を上げる。
「そうそう、そのリアクションよ♪もっと見せてね・・・んっ！」

ぶぼおおおおおおおおぉぉぉぉぉ〜〜〜っっっ！！！

「んぐうううううううううううううっ！？」
ノリノリで２発目のオナラを浴びせてくる姉さん。
鼻が腐り落ちるような錯覚に襲われ、視界がどす黒い黄色に染め上げられる。
「２度ある事は〜♪３度ある〜♪ふんっ♪」

ぶぶぶっふうおおおおおおおおぉぉぉぉぉ〜〜〜っっっ！！！

その言葉通り、姉さんが３発目のオナラを浴びせてくる。

筆舌尽くし難い強烈な発酵臭。
このままでは鼻だけでなく、頭の中まで腐ってしまう。
「さあ、まだまだ、行くわ・・・よ・・・」
「姉さん？」
ふいに姉さんが静かになったので、おそるおそる呼び掛けてみる。
返事はなかったが、
「すぅ・・・すぅ・・・」
かすかな寝息が聞こえてきた。
どうやら眠ってしまったようだ。
「騒ぐだけ騒いで寝るって、まるで子供みたいですね」
少し微笑ましい気持ちになったところで、両脚の拘束を外しに掛かる。
しかし、

ぶぶぶぶぶうううううぅぅぅぅぅ〜〜〜っっっ！！！

両脚を動かした事で刺激されたのか、姉さんのお尻から強烈なオナラが噴き出した。
「むうううううううっ！？」
「んんっ、大丈夫よ、マユ・・・お姉ちゃんは、力持ちだから・・・」
自分の絶叫に紛れて、姉さんの寝言が聞こえてくる。
（これって・・・）
どうやら姉さんは 10 年前の夢を見ているらしい。
あの日、私は木登りをしていた姉さんの真似をして、神社の木に登った。
その時、枝から落ちそうになった私を、姉さんは必死に支えてくれだのだ。
もしも姉さんがいなければ、私は大怪我していただろう。
（結局、あの時は神主さんが助けてくれたんですよね）
考えてみれば、姉さんが私に過剰に絡んでくるようになったのは、あの事件が切っ掛けだったのかもしれない。
（つまり、この状況も私の自業自得なんでしょうか？）
「んっ・・・」

ぶぶっぶぶぶっぶぶっぶぶぅぅ〜〜〜っっっ！！！

私の思考を遮るように、眠っている姉さんのお尻から強烈なオナラが放たれた。
「むうううううっ！？ね、姉さん、眠るならせめて身体の上下を――」

「んんっ・・・！」

ぶぶぶっすうううううううううう〜〜〜〜っっっ！！！

不愉快そうな声を漏らし、姉さんがさらにオナラを浴びせてくる。
起こすにしても、下手な方法では逆効果になりそうだ。
そんな事を考えている間も、

ぶぶぶっぶうううううううううう〜〜〜っっっ！！！

姉さんのお尻からは次々にオナラが生み出されてくる。
その濃密な発酵臭に耐え切れず、
「うっ・・・」
私は意識を失った。

選択肢に戻る。